

# 切腹にまつわる語彙と概念について

——近現代の日本と海外の辞典と研究史を中心に——

コルネーエヴァ・スヴェトラナ

はじめに

## 1. 切腹の歴史の概要

## 2. 切腹という語の意味（現代）

### 2.1 日本の辞典に現れる切腹の関連用語

### 2.2 海外の辞典に現れる切腹の関連用語

## 3. 先行研究における腹切の解釈

### 3.1 腹切をめぐる研究史の概要

### 3.2 腹を切る行為の類型化の試み

おわりに

はじめに

日本の歴史において、刃物で腹を切って死ぬ行為が「切腹」ないし「腹<sup>はら</sup>切<sup>きり</sup>」と呼ばれたことは周知のごとくである。もともと、切腹は戦場で敗北が近づいた武士が自ら腹を切って命を絶つという一種の自殺行為がその原型である。自殺行為として発生した切腹はやがて、その応用範囲が広がった。具体的にいえば、室町時代頃から「賜死<sup>しし</sup>」として、権力者から命じられるという新たな側面が加わった。そして江戸時代には、受刑者の名誉を

保つ刑罰として適用されるようになり、強制される死の一面も定着した。そのなかで、腹を切って自殺する方法も依然として取られていたように、腹切は多様な動機に応えられ、幾通りもの形態を展開していったと見なすことが自然である。

そのためか、腹を切る行為を表す言葉が多数存在している。たとえば、後述するように、切腹の他に腹切、屠腹<sup>とふく</sup>、自害<sup>じがい</sup>、自刃<sup>じじん</sup>、割腹<sup>かつぶく</sup>、詰腹<sup>つめぼら</sup>などがある。とりわけ「切腹」という語は自殺と刑罰の両方の意味を含んできたがために、混乱が生じやすい。

以上の問題関心から、本稿では切腹にまつわる語彙に注目することにした。具体的に、日本および外国の主要な辞書や事典に加え、代表的な研究史において切腹がいかように扱われてきたかを確認し整理する。

## 1. 切腹の歴史の概要

切腹は平安時代に起源し、鎌倉時代にかけて武士階級の台頭とともに定着した。初期の切腹には、腹を十文字に切ったあとに喉を突くやり方が多かった。動機には、自分の真心<sup>まごころ</sup>を人に示すためや、戦場や人の面前では目につきやすく、勇壮に見えるため、また敗北の際に敵に捕まえられることを免れるためなど、があった。

江戸時代の切腹の主な形態は刑罰として命じられた切腹であった。刑罰としての切腹の最初の例は、室町時代の大永元（1521）年、今井頼弘ら3人が敵に内通していたという罪で切腹させられた件が挙げられている（山本 2003: 28 参照）。切腹が処刑として法制化されたのが、元禄 16（1703）年の赤穂浪士の処罰のためであるという見解がある（大隈 1973: 117 参

照)。明治6(1873)年に切腹が廃止されたあと、ときおり意志的な腹切が行なわれたものの、その慣習は徐々に姿を消していった。最後の刑罰としての切腹とされるのは、1868年に実行された備前藩士・滝善三郎の切腹である。

次に、<sup>じゅん し</sup>殉死の一種である<sup>おいばら</sup>追腹が辿った変遷について手短かに紹介しよう。中世の戦いのなかで見られた意志的な殉死が江戸時代に入ってから、各藩での殉死者の数の争いがあつたぐらゐに乱用されるようになった。そこで乱用への非難が起こり、結果として寛文3(1663)年に殉死が禁止されるようになる。寛文8(1668)年にこの法度を破った宇都宮藩主・奥平忠昌の家臣、杉浦右衛門の一族が断絶された。追腹が禁止されたあと、刑罰としての切腹が数を占めるようになった。

1868年に起きた明治維新後に見られた切腹には、以下のようなものがある。明治時代の初期は<sup>ふん し</sup>憤死、<sup>かん し</sup>諫死(動機は新政府に対する不平・不満、武士が禄を失って困窮、旧藩時代の自分の部下が上役になった悔しさ、など)、<sup>の ぎ まれすけ</sup>乃木稀典の自決がその一例である追腹、第二次世界大戦での敗北からの自刃などである。

戦後の日本では、いわゆる「憂国思想」からの腹切(三島由紀夫)や興味本位および過激的な欲望に駆られて腹を切る事例があり、実際の行為としての切腹はもはや遠い過去か、現実から離れた世界に属しているというイメージが作られた。

次項以降では、切腹にまつわる語彙がどれだけあるか、日本と海外の辞典から拾ってその意味や語法を挙げていく。

## 2. 切腹という語の意味（現代）

腹を切って果てる行為を表す代表的なものに「切腹」「腹切」「割腹」があるが、海外ではもっぱら「ハラキリ」という語が一般化していることがよく知られている。四方田犬彦によれば、「腹切」という言葉が中世よりしばしば用いられてきたが、明治以後に文章で通常に使用されたのは「切腹」あるいは「割腹」である。こんにちのハラキリという言葉は、まずヨーロッパにおいてとりわけ一般化し、それから日本に逆輸入されたと推定される（四方田 1999: 198 参照）。

ここではまず、切腹にまつわる用語の意味に注目したい。主要と思われるものを『日本国語大辞典』（2000 - 2002 年出版）よりピックアップし、アイウエオ順で以下に挙げておく。なお、「切腹」という語については 2.1 で取りあげるためにここでは省略する。

追腹 主君の死後、臣下があとに続いて切腹すること。古くから行なわれたが、江戸幕府は寛文三年（1663）五月に禁止した。殉死。供腹。<sup>ともばら</sup>⇔<sup>さきばら</sup>先腹

割腹 腹を切って死ぬこと。切腹。はらきり。

諫死 死を覚悟して目上の者をいさめること。また、自ら死ぬことによって目上の者をいさめること。死諫。<sup>しかん</sup>

先腹 主君の死に先立って、切腹すること。⇔追腹

自害 自分で自分の身を傷つけて死ぬこと。近世では、男の切腹に対して女がのどを刺して自殺するのにいう。自刃。自尽。自殺。

自決 <sup>じけつ</sup> 1. 自分の意志で自分のことを決めること。2. 自殺する

こと。自害。

<sup>じさい</sup>自裁 1. 自分から生命を絶つこと。自決。自殺。2. 独断で裁くこと。

<sup>じし</sup>自死 「じさつ（自殺）」に同じ。

自刃 刀剣を用いて自分の生命を絶つこと。

<sup>じじん</sup>自尽 自分で自分の生命を絶つこと。自殺。自決。

殉死 主君、主人の死後、臣下があとを追って自殺すること。追腹。

詰腹（多く、「詰腹を切らせる」の形で用いる）1. 他から強いられて切腹すること。2. 強制的に辞職させられること。3. 他から自分の意にそわないことを無理にさせられること。

屠腹 腹を切ること。切腹。割腹。

供腹 家来が主君のあとを追って切腹すること。追腹。殉死。

腹切 自分の腹を切って自殺すること。切腹。割腹。

腹を致す 切腹する。腹を切る。

腹を切る 1. 切腹する。2. おかしさに耐えきれないで大笑いをする。腹をかかえる。3. 自分で費用を出す。4. 責任をとって辞職する。

腹を仕る 切腹する。

腹を召す 他人が切腹することを敬っている。

憤死 1. 憤って死ぬこと。憤慨のあまり死ぬこと。2. 野球で、ランナーが惜しいところでアウトになること。

<sup>むねんばら</sup>無念腹 無念のあまりに腹を切ること。

以上をまとめると、腹切・切腹・割腹は広い意味では同義であるが、後述するように、用法が慣習的に異なることに留意しなければならない。自裁・自死・自決・自尽は具体的な死ぬ方法を含意しない語で、同義である。自刃は、筆者が表1に示したように、死ぬ方法を含意した語である。自裁については、『日本史大事典』によれば、明治の新律綱領に定められた、士族に対する切腹の刑だと解説されている。しかし、ここではその意味は限定された使い方として、含めずに考える。

中康によると、自害という語は自決と自尽のどれにも用いうるものである。また、憤死と無念腹は相通じる概念である（中康 [1960] 1987: 23 参照）。

以上の用語を刃物使用の有無によって二つのカテゴリーに分けると表1の通りになるであろう。

表1 「刃物の使用有無」から見た切腹関連用語（『日本国語大辞典』に収録されている語彙に限定）

<p>「刀（刃物）を使って死ぬこと」の意味を含有する語：</p> <p>追腹（殉死）、割腹、先腹、自害、自刃、切腹、詰腹、屠腹、供腹、腹を致す・切る・仕る・召す、腹切、無念腹</p> <p>「刀（刃物）を使って死ぬこと」の意味を含有しない語：</p> <p>諫死、自決、自裁、自死、自尽、憤死</p>
--

## 2.1 日本の辞典に現れる切腹の関連用語

ここでは、「切腹」という語が現代の国語および日本史関連の代表的な

辞典・事典においてどのように紹介されているかを挙げる（事典における用語の収録状況は別表1を参照）。『日本国語大辞典』での切腹の項目は以下の通りである。

切腹 1. 自分で刀剣を用いて、腹を切って死ぬこと。はらきり。  
割腹。屠腹。2. 江戸時代、武士に科した刑罰の一つ。死刑のうちで、もっとも軽いもの。検死役の前で、みずから腹を切るところを<sup>かいしゃく</sup>介錯人が後ろから首を打ち落とした。

上の説明文から、切腹は自殺方法の一つであること、そしてそれが刑罰として用いられたことがあることを確認できる。次に、『日本史大事典』（1993年）より、法政史学者の平松義郎が執筆した切腹の項目を取りあげる。

切腹 刀で腹を切って死ぬことで、自殺または死刑の方法として用いられた。<sup>かつぶく</sup>割腹、<sup>とふく</sup>屠腹、<sup>はらきり</sup>腹切ともいい、日本の習俗として外国人にも「はらきり」の名で知られている（後略）。

日本の最初の国語事典といわれる『大言海』（初版は明治25-26〈1892-1893〉年刊行）において切腹に関係する用語を引くと、「切腹」「殉死」「爪腹」の記事が見当たり、以下の通りである。

\*せつぷく 切腹

(一) 自ラ、腹ヲ切り割キ、且ツ、喉ヲ断チテ死ヌルコト。ハラ

キリ。割腹。屠腹。

(二) 徳川氏ノ制ニハ、士族ノ閏刑ノ最モ重キモノトシ、命ジテ  
切腹セシム、罪ノ輕重ニ從ヒテ、其祿ヲ奪フアリ、子孫  
ニ興フルアリ、或ハ減ジテ興フルアリ。賜死。

\*じゅんし 殉死 主君ノ死ヲ追ヒテ自殺スル。オヒバラ。

\*つめばら 爪腹 其身ノ爪<sup>ツメサキ</sup>劣ヲ以テ切腹スル。

『大言海』における切腹の説明から、「自殺方法」としてのものに加え、「徳川時代の刑法下の刑罰」としての用法があったことを確認できる。後者については、武士階級に限定された閏刑<sup>じゅんけい</sup>すなわち特権的な刑罰で、権力側から命じられるものであり、賜死と同義語である。また罪の重さによっては罪人の俸禄<sup>ほうりく</sup>を完全に没収するか、減額するか、または没収せず子孫に相続させるかの処置がとられたと書いてある。

また、『大言海』には「爪腹」という項目が見られ、爪先で腹を裂いて切ると解説されているが、この「爪腹」については、管見の限り他の書物等で見当たらないので、「詰腹<sup>つめばら</sup>」の誤った表記と考えられるが、この語の存在有無について今後注意して調べることにしたい。

次項では海外の辞書・事典に切腹ないし腹切がどのように紹介・解釈されてきたかを取りあげていく。

## 2.2 海外の辞典に現れる切腹の関連用語

既述したように、海外では「セップク」よりも「ハラキリ」という語が定着している。海外における「ハラキリ」という語の定着時期だが、19世紀後半から定着したと見られる。幕末に日本で滞在していた外国人が実



際に切腹刑を目撃した事例——明治元（1868）年に起きた神戸事件において責任を取らされた瀧善三郎や堺事件の箕浦猪之吉らなど——が記録され、切腹を目の当たりにしたミットフォードやサトウの見聞記が欧米に紹介され広まったことが背景にある（コルネーエヴァ 2009 参照）。また、「ハラキリ」という語の定着過程において、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて欧米で製作された舞台、そのなかで演じられた「ハラキリ」場面はインパクトが強く、定着に一役を買っている（多和田 2016 参照）。

では、主要な事典を紐解いてみよう（事典における用語の収録状況は別表 2 を参照）。明治 19（1886）年にアメリカ人宣教師で医師のジェームス・ヘボン（James C. Hepburn）が編纂した『和英語林集成』第 3 版では「ハラキリ」と「切腹」の項目があって、腹切は以下のように「腹を切り開くことによる自殺（suicide）」と解釈されている。

Harakiri ハラキリ 切腹 n. Suicide by cutting open the abdomen. Syn. SEPPUKU.

次に、明治 31（1898）年に刊行された『ブルーワー英語故事成語大辞典』では HARA-KIRI の他に *happy dispatch* という表現が見受けられる。

Happy dispatch → HARA-KIRI

HARA-KIRI 切腹.（日本語. *Hara*, 腹；*kiri*, 切ること）割腹自殺のこと. 幕府の武将、大名などはひどく面目をつぶしたり、自分の名誉が明らかに危うくなると切腹した. 切腹や割腹 *Happy-dispatch* は中世期から行われていたが、1868 年に至って、義務

として強制されることがなくなった。切腹行為はしかるべく儀式ばって行われたものである。1870 年の法律によって、死刑の代わりに切腹をする特権が武士 SAMURAI には認められた。公認の慣行としての切腹が廃止されたのは 1873 年のことである。

上記の *happy dispatch* という言葉の意味について、*The Oxford English Dictionary* (OED) には a humorous name for the Japanese form of suicide called HARA-KIRI と解説されている。すなわち、腹切にあたる滑稽な名称ということで、和訳すれば「ハッピーな気持ちでさっさと片付ける（自害する）」ということになる（dispatch の意味に making away with by putting to death; killing; death by violence がある）。これは言ってみれば一種のオリエンタリズム、西洋の東洋に対する歪んだまなざしともいえる。また、この表現は海外の文献や公刊物においていつ頃から使われ始めたかについては、OED によれば、日本の切腹を語る記事として、イギリスの新聞で 1859 年の The Times 紙に The Japanese are .. taught .. the science, mystery, or accomplishment of 'Happy Dispatch' (Times 26 March 9/2) という文章が載っている。よって、少なくとも 1850 年代から使われていることが明らかである。

例えば、Marcus B. Huish（1845 年生まれで 1921 年没、イギリス人の法廷弁護士、小説家、美術商）が *Japan and Its Art* (1889) において江戸時代の武士が大小の刀を帯刀して、短刀を腹切のために使用したと記した箇所には Harakiri, or Happy Despatch, terrible mode of suicide” と述べている（Huish 1889: 70）。なお、この著書に見られる despatch はイギリスで用いられる表記で、dispatch と同じ意味である。

次に、英語圏でない国で腹を切る風習がどのように紹介されていたのか。一例として、筆者の母国であるロシアで1903年に出版された権威のある百科事典に「ハラキリ」という項目が見当たるので紹介したい。和訳すると次のようになろう。

ハラキリ、あるいはセップコ（前者は純粋な和語であり、後者は漢語である）——腹を切り裂くこと——は数世紀に渡って、日本人の間で最もありふれた自殺方法であった。ハラキリの起源は中世に遡っており、土地争いの時、生きながら勝者の手に捕らわれないように、敗者がこの方法を使った。時が経つにつれ、ハラキリは習慣の性格を帯びるようになり、その中で二種類に分かれるようになった。すなわち、強制的なハラキリと自主的なものである。前者は1500年から日本の軍事エリート——サムライ——の一種の特権であり、それは、罪を犯した際に、死刑執行人の手で殺される代わりに自分で自分自身を殺す機会として与えられた。その場合、受刑者は公式に自殺の場所と時間を知らされ、それに出席するのに役人たちが派遣された。現在の日本では強制的なハラキリは存在していない。この方法が自主的に使われたのは絶望の時や、避けることが不可能な、行なわれようとする不公平への抗議として、あるいは、自分が望むようなことを他人に働きかけるためや、主人や上司への忠誠を表明するため、などである。自主的なハラキリは、稀ながらも、現在も行なわれており、それは、人々は昔の模範に鼓舞され、何らかの重要な理念のために命を犠牲にする時である。例えば、中国に勝った後、ロシア、ドイ

ツとフランスに遼東半島からの撤退を要求された日本政府がそれを受けるかどうかと迷った時、政府が譲歩するように、そして、新たな戦争から国を守るようにと、40人が自主的なハラキリを遂げた。ハラキリは最も名誉ある自殺方法であった。そして、日本では、ハラキリして死んだ人は深く追悼されている。もっとも有名なのは47人の浪人であり、彼らは、死んだ主君の仇討ちを遂げたあと、1703年に当局にハラキリを命じられた。ハラキリの執行はいつも荘厳さを伴っていた。近代になって、ハラキリが使われなくなりつつあって、多くの人が素早く自決できなくなってから、切腹者が腹に短刀を突いた瞬間に、自殺したい者の親友が刀で頭を切り捨てることが習慣になった。女性は、腹を切り裂く代わりに、剃刀で喉を切断した (Brokgauz F.A., Efron I.A. 編, [1903] 1993 第 [37] 73 巻: 64)。

上の記事では、切腹に二種類、すなわち自殺の手段である自主的なものと、刑罰として強制されるものがあり、後者においては切腹者の名誉が保たれていることが明記されている。なお、女性の自決方法の描写は他の辞典での記述と類似している。

最後に、欧米において、現代の辞典における切腹の説明はどうなっているか。切腹という風習の解説にまで及んだ記事として、1988年に刊行された *The New Encyclopaedia Britannica Micropaedia* から Seppuku の記事<sup>(注1)</sup>を抄訳する。

封建日本で侍(武人)身分の人たちによって実行された、名誉

ある自殺の仕方である。ハラキリという語は、外国人の間で広く知られているが、日本人はあまり使わず、一般には切腹という語を使う（中略）。自殺のきわめて苦痛ですぐに死に至らない形である切腹は、侍の勇敢さ、自制心および強い決意を示し、目的の誠実さを証明するのに効果的なやり方として奨励された。

切腹は二種類、すなわち、任意的なものと義務的な切腹があった。任意的な切腹は 12 世紀の諸戦争の中で発達したやり方であり、それは、戦場で負傷した武人が敵に捕まるという不名誉を逃れるためにしばしば利用された。時折、侍たちは、主君の死を追うことで主君への忠誠を証明するためや、行政機関あるいは上官の政策に反対するためや、職務上の失敗を償うために実行した。近代日本では任意的切腹が多数行なわれた。

義務的な切腹は、侍にとって一般の死刑執行人に斬首されるという恥辱を免れさせるための主要的な刑罰の方法に関連している。この習慣は、15 世紀から切腹が廃止された 1873 年までもっとも多く見られた。儀式のしかるべき進行が大いに強調された。

以上の記事に、自殺方法としての切腹は執行において極めて困難ですぐに死に至らないこと、任意による切腹のほかに刑罰として強制されることがあったと明記され、これはすでに共通認識として定着していることがわかる。次節において、切腹にまつわる代表的な先行研究を紹介し、切腹がどのように解説されてきたかを見ていく。

### 3. 先行研究における腹切の解釈

#### 3.1 腹切をめぐる研究史の概要

腹切が実施された時代、腹を切る動機や刑罰として適用された際の条件、刃物使用の有無などによって切腹の位置づけが異なり、多様なタイプが生み出されるにいたった。これらを整理・解説する研究史を簡単に紹介しよう。

切腹に関する学術的な研究は主に法制史、歴史、思想、民俗学、文学の視点からなされてきた。

切腹の歴史をテーマとする著書として広く知られ、出典として利用されているのは歴史家で小説家の大隈三好が著した『切腹の歴史』（1973年）である。大隈は軍記をはじめとする数多くの史料に拠りながら、切腹の起源に遡って、その発達の歴史を時代ごとに追ってゆき、三島事件を切腹の最後の事例として著作を締めくくっている。腹の切り方による切腹の分類（後述）、作法、具体的な切腹例が詳細に論じられているのがこの本の特徴である。これは切腹の歴史的な総合研究というべきものであろう。

歴史的観点から切腹を眺める最近の研究として挙げられるのは歴史学者の山本博文の『殉死の構造』（1994年）や『切腹——日本人の責任の取り方』（2003年）である。江戸時代の切腹を題材にする後者の著作において、どの程度の落度で切腹する必要があったかという問題が焦点化されている。「江戸時代では、死ぬに値しない罪や手落ちでも、死ななければならないことがよくあった」と述べる著者は、武士が切腹に追い込まれていた無念さに注目している（山本 2003: 12）。

フランスの思想家、モーリス・パンゲ (Maurice Pinguet) はその著作、

*La mort volontaire au Japon* (1984 年；和訳は『自死の日本史』、1986 年)のなかで、歴史的起源から三島事件まで通時的に切腹を追いながら、それを支える思想的・精神的な要素を中心に議論し、切腹の自由意志的な側面を強調している。切腹は死の手段であると同時に、すべての武士たちを「同じ倫理の織り目を持つ一枚の織物に統合していた道德の要の点を、はっきりと、めざましいまでにはっきりと指し示す役割をも担っていたのである」(Pinguet 1984: 100=1986: 135)。

パンゲは豊かな表現力を駆使しながら、一つの行為としての切腹の道德的な意味合いを追い、何よりもまず、一人の武士の意志の強さ、高潔さを読者に伝えようとしたのである。「意志的な死」の險しく困難な技ほど高く評価されたものはなかった。なぜならば、敵に勝つことはなるほど難しいことだが、自己に勝利することはさらに一層困難であったからである。

民俗学の視座による切腹の研究として、千葉徳爾の『日本人はなぜ切腹するのか』(1994)を挙げておきたい。千葉は切腹の生理的な側面を論じ、切腹の類型を提示しているほか、人を切腹に志向させるものは何か、という議論をしている。千葉は、生命の根源は腹部の内臓に存在するという解剖学的な考えから出発し、人が自分の真の心持を他に示そうとする具体的手段として、切腹が発生し伝承されたという仮説を立てている。かれは、腹を切る行為が武士だけではなく、一般庶民の中にも行なわれたことに着目し、切腹がその形式・意味の変遷にもかかわらず近現代まで残留した主要因子として、切腹が「民俗化」したと述べている(千葉 1994: 221-223 参照)。

次に、歴史社会学者の池上英子(Eiko Ikegami)が展開した議論に触れておこう。武士の個人主義と順応化を問題化した *The Taming of the*

*Samurai: Honorific Individualism and the Making of Modern Japan* (1995年; 和訳は『名誉と順応——サムライ精神の歴史社会学』、2000年)において、武士の名誉文化の文脈で切腹の制度化および神話化を扱っており、「死を人前で披露する」ことの意味を説いている。池上によると、儀式化された切腹は武士の名誉ある公式身分のしるしとなって、新たな象徴的な意味を獲得した (Ikegami 1995: 253=2000: 247 参照)。

先行研究について、批判的な検討を加えるならば、次のようなことを指摘できるであろう。江戸時代の終わりまでに見られた刑罰と自死という二つの側面をもつ腹切について、そのどれか一つの側面を強調する立場がとられたといえる。武士が切腹を強要されたという側面を強調する歴史家の山本は、「江戸時代の武士は、意外なことで切腹を余儀なくされている。現在なら罪にもならないようなことで、切腹する羽目に陥った武士は多い」と述べており、武士が生きていかなければならなかった「奇妙な規律」を論じている (山本 2003: 112)。ここではこの見解を切腹の強制説と呼んでおこう。

思想史家のパンゲは、山本とは対照的に、刑罰として命じられた場合の切腹ですら、それがいかに簡略化された形で行なわれたとしても、死の瞬間を決定するのは切腹者であり、切腹が高貴で名誉ある自死であると強調している (Pinguet 1984: 150-151=1986: 202-203 参照)。民俗学者の千葉もパンゲに近い立場をとっている。『日本人はなぜ切腹するのか』において、千葉は切腹の能動的な側面を強調する文脈のなかで、切腹が潔白さの最後の表明であると述べ、「日本人ことに軍人が、いさぎよさのシンボルとして誇りにすら感じていた自害方式」とであると指摘している (千葉 1994: 157)。山本の強制説に対し、パンゲや千葉は切腹の主意説を代表している



といっても過言ではない。

以上のように、これまでの研究史において切腹の主意説か強制説かいずれかに偏る傾向が見られた。今後は両側面に注視した総合的なアプローチが必要だと思われる。

### 3.2 腹を切る行為の類型化の試み

ここでは切腹をめぐる、これまでになされたタイプ分けの試みを取りあげる。切り方と様式、自発的／義務的な切腹、刑罰的な切腹の分類という順で見ていく。

#### 1) 切り方や様式による呼称

大隈三好著の『切腹の歴史』(1973)によれば、切腹は刃物の種類や使い方、また切腹の動機によって、違った呼称で呼ばれている。それを大ざっぱに分けるとそれぞれ (a) と (b) のようになる。なお、(b) の呼称は大部分江戸時代以降に表れたものと考えられるが、いずれも明確ではない (大隈 1973: 99 参照)。

(a) 切り方による呼称：一文字腹、十文字腹、二文字腹、三文字腹

(b) 様式や動機の違いによる呼称：立腹、坐腹、無念腹、鎌腹、

おうぎばら 扇腹、かげばら 陰腹<sup>(注2)</sup>、詰腹

これらの解釈について、大隈は中康弘通著の『切腹』(1960)に拠っているとみられる。

## 2) 自発的 (voluntary) な切腹と義務的 (obligatory) な切腹の2種類

すでに述べたように、腹を切る行為は一方では自殺の方法として、他方では強制される刑罰の一種として適用されたという認識は日本国外で定着しているといえる。

切腹におけるこの二つの側面の存在について、遅くとも19世紀には指摘されている。その一人として、1866年から1870年までに日本に滞在し、観察したものを日記に記したイギリス外交官のアルジャーノン・ミットフォード (Algernon B. Mitford) は *Tales of Old Japan* (1871年) の付録において、切腹を、死ぬ以外の何の選択も残されていない時に武士が採用していた自殺方法であると記述している。自由意志で切腹を遂行する者もいれば、武士階級の特権の範囲を越えないような罪を犯した場合、目上の人に切腹を命じられた者もいるとしている (Mitford 1966: 375 参照)。

明治6 (1873) 年から30年以上日本に滞在し、海軍兵学校および東京帝国大学で日本語学教師をしたイギリス人のバジル・チェンバレン (Basil H. Chamberlain) は『日本事物誌1』(1890年)の「Harakiri」という項目において、切腹には二種類——義務的 (obligatory) と自発的 (voluntary) ——があったと述べている。「前者は政府が与える恩典で、この結果、武士階級の犯罪者は、一般の死刑執行人に引き渡されることなく、自死を選ぶことを許されるのである。死刑囚に時と場所が公式に通知され、役人が派遣され、その儀式に立ち会う。自発的切腹は、絶望的困難に陥った人間が行なったもので、また、死んだ主君に対する忠義から、あるいは、生きている主君の誤った行為に抗議するためにも (もし他の抗議が無駄である場合に) 行なわれた」(Chamberlain [1890] 1905: 219-218= 1969: 277)。

社会学者で早い段階で切腹に触れたのはエミール・デュルケームであ

る。かれは『自殺論』(1897年)において、自殺を4つのタイプ、すなわち自己本位的自殺(suicide égoïste)、集団本位的自殺(suicide altruiste)、アノミー的自殺(suicide anomique)、宿命的自殺(suicide fataliste)に分けている。そのなか、集団本位的自殺は便宜上、義務的なものと任意的なものに分けることができるとしている。そして切腹は任意的(随意的)集団本位的自殺の分類に入り、それは些細な事情、表向きの実にくだらない動機の自殺として紹介されている。任意的(随意的)集団本位的自殺は義務的集団本意的なものと本質的には類似している。ただし、任意的(随意的)集団本位的自殺の場合、自殺は社会によって明らかに要求されていないが、一つの徳とされた点の特徴である。デュルケームが、集団本位的自殺に関する記述のなかで切腹に触れている箇所は以下の一つだけである。

日本人がまったくつまらない理由のためにも簡単に切腹をすることは有名である。伝えられるところによれば、日本では、かたきどうしが、たがいを倒す術を競いあうのではなく、みずからの手で腹をさく術の巧みさを競いあうというじつに奇妙な果たし合いの習わしさえ行なわれているという(Durkheim 1897: 239=1985: 266-267)。

上の記述においてデュルケームが参照したのは E. Lisle の *Du Suicide* (1856) であるが、リースル自身はフランス人宣教師・歴史家の Pierre Charlevoix の『総説日本史』(1754)に拠っている<sup>(注3)</sup>。「つまらない理由のためにも簡単に腹を切る」をするという見解は、いうまでもなく、その

前後のジャポニズムに支えられ、切腹を奇異で奇妙なものと思なす切腹観として定着したのである。また、デュルケームの研究対象はあくまでも自殺であるので、処刑として強要された切腹は直接的な対象から外れ、腹を切る行為は結果的に部分的にしか捉えられなかったのは仕方がないことといえよう。

なお、自主的な切腹と強制的な切腹の間として、「詰腹」を位置づけることができる。『日本史大事典』において、詰腹とは職務上の責任、世間の義理から人に迫られてやむなく行うものとして説明されている。大隈三好は詰腹について、「当人の意志に反して周囲から無理矢理に腹を切らせられること」と述べている（大隈 1973: 99）。千葉徳爾によれば、名誉を保つ切腹刑が受けられそうもない場合に、「親族友人などが刑の決定前に本人に迫って自殺させたり、場合によっては死をのがれて逃亡しようとする者は刺し殺して、名目上自殺として届け出る〈詰腹を切らせる〉という方式もあった」とある（千葉 1991: 154）。

### 3) 刑罰的な切腹の分類

刑罰としての切腹は、第1節に触れたように、江戸時代に武士に対し与えられる、名誉を保つ刑であった。それは途中まではいかに自決の形をとっていたが、最後に首を刎ねることで終わらせる決まりであった。興味深いことに、刑罰としてのものを「腹切」などといわず、江戸時代の判決文に「切腹」としか見受けられないことからわかるように、「切腹」という語を用いていた。

受刑者の階級や格によって切腹刑の執行方法が変わることについては多くの学者が触れている。外国人による記述を挙げると、この問題に触れた

一人として、ドイツ人の哲学者・宗教学者である Georg Siegmund がいる。シーグムンドは『生か死か——自殺の問題』(1970 年)において、切腹の執行は旗本、大名の家来、大名とで異なると述べ、ミットフォードが挙げた身分による三つの切腹刑のタイプを次のように要約している。

三種の切腹が区別されていた。下級士族の所属員たる「旗本」は、介添え人〔介錯〕としての二名の武士のあいだに坐らされていた。死ぬ運命にある人の前には、木刀が置かれた。彼がこの木刀をつかもうと身を傾けるとすぐに、彼の左に立っている介添え人が彼の首を切り落とした。そしてもうひとりの介添え人はその切り落とした頭を、首実検のために、主要な証人のまえに持ち上げて見せるのであった。

領主たる大名の家来は、同じように介添え役の間に坐らせられた。彼は金属製の短刀を用いてみずから、その際なるべく腹部の大動脈に当たるように努めながら、自分の服を切り開かねばならなかった。彼は刀をゆっくり右側へと動かし、傷の中でその刀を回して、さらに上方に向けて幾分小さく切り込むのである。そして彼が苦痛の中で前方に身をまげると、ひとりの介添え役——たいていは彼の親友——がその首を打ち落とした。

ところで大名は、同じやり方でみずから割腹し、その上さらに、みずから頸部を掻き切った。彼は首をはねられることはなかった。またそのようなことは不名誉と見なされていたので、死なんとしている者が後方に倒れることは、極力避けられた(後略)(Mitford 1871: 406-8=Cf., Siegmund 1970: 90)。

上記について、たとえば大名は首を刎ねられることがないといった指摘は明らかに誤りであるが、シーグムンドなどが記しているように、切腹の場所の設営から様式に至るまで武士の格などによって違いが見られたことは確かである。刑罰としての切腹は荘重な儀式を伴い、江戸時代中頃から様式化していった。切腹者の家と家禄への対処、切腹が行われる場所の選定と設営、派遣される役人の身分と数、介錯する人の身分、切腹の座につく前後の作法について細かい決まりがあった（平松（1960）1988: 1006-1007；小野編 1998: 143-145 参照）。切腹刑の適用範囲や執行方法はそれ自体が重要なテーマであり、依然として不明な点が多いのが現状といえる。この問題については法制史からのアプローチを取り入れた整理・検討作業が急務であり、今後の課題としたい。

## おわりに

切腹は日本の古代に生じ、その後は多様な動機に応じる形でいくつもの形態を展開してきただけに、把握するのが困難な現象である。本稿では切腹にまつわる言葉に注目し、第1節では日本の、第2節では欧米の辞書や事典に収録されている関連用語を拾い、主要なものの意味と語法をまとめてみた。そのなか、「腹切」「切腹」「割腹」は広い意味では同義語であり、現代において「腹切」も「切腹」も基本的に同じ行為を指しているが、使い分けとして、江戸時代に刑罰として命じられたものを指す場合は「切腹」という言葉が一般的に用いられることに留意したい。現代においても、1970年に自分で腹を切ったうえで介錯された三島由紀夫の死は「割腹自決」と称されているのは刑罰として与えられたものではない背景が

あつてのことといえる。

欧米では、日本と違って、「ハラキリ」という語が19世紀後半から定着していった。当初、「ハラキリ」は *happy dispatch* すなわち「ハッピーな気持ちで自害する」という意味合いを持ち、日本人の奇妙で奇異な風習として語られる傾向の、オリエンタリズムに支えられた言葉であった。戦後は学術的な研究も進み、偏った見方が是正しつつあるなか、「切腹」という語も欧米で浸透してきて、認識されつつある。たとえば、Andrew Rankin 著の2011年の著書のように、近年は著作の題目などに *seppuku* という言葉が見受けられるようになったのはその現われであろう。

切腹関連の用語の意味を確認したのち、第3節では切腹に関する研究史を概観した。切腹は大きく分けて、自殺の手段である自主的なものと、名誉を維持する特別な刑罰として主に江戸時代に適用された強制的なものとの存在したことについて、遅くとも19世紀には認識されていたことを確認できた。自殺にも刑罰にもなりうる切腹は、その両側面を見落とさず明らかにすることによって全貌が描けると筆者は考える。

以上のことから、今後は、自主的に選ばれた腹切の動機と前後処置に加え、刑罰としての切腹の適用条件や方式、裁判記録や作法を記した故実書の比較検討を課題に取り組むこととしたい。

## 注記

1. 英語による記事の書き出しは次の通りである。

Seppuku (Japanese: “self-disembowelment”), also called HARA-KIRI (“the belly-cutting”), the honorable method of taking one’s own life practiced by men of the samurai (military) class in feudal Japan. The word hara-kiri, though widely known to foreigners, is rarely used by Japanese, who prefer the term seppuku. The

proper method was to plunge a short sword into the left side of the abdomen, draw the blade across to the right, and then turn it upward. It was considered exemplary form to stab again below the chest and press downward across the first cut, and then to pierce one's throat. Being an extremely painful and slow means of suicide, it was favored as an effective way to demonstrate the courage, self-control, and strong resolve of the samurai and to prove sincerity of the purpose (vol.10, p.642).

2. 蔭腹とは、人形浄瑠璃劇・歌舞伎の演技、演出で、観客に見えない舞台の陰で切腹し、それを隠して舞台に現われ、苦痛をこらえて述懐する演技、または、場面である（『日本国語大辞典』第2版参照）。
3. 「切腹」に当たる表現として、デュルケームはリースルが述べた“(前略) les Japonais, hommes, femmes et meme enfants, s'ouvrent le ventre (後略)”の“hommes, femmes et même enfants (男、女、子供までも)”の部分省略し“(前略) les Japonais s'ouvrent le ventre (後略) (日本人は腹を切る)”という表現をとった (Lisle 1856: 333)。

## 参考文献

- Chamberlain, Basil H., [1890] 1905, *Things Japanese, Being Notes on various subjects connected with Japan, for the use of travelers and others*, 5<sup>th</sup> ed. rev., London: Murray. (=1969, 高梨健吉訳『日本事物誌 1』平凡社。)
- 千葉徳爾, 1991, 『たたかひの原像——民俗としての武士道』平凡社。
- , 1994, 『日本人はなぜ切腹するのか』東京堂出版。
- Durkheim, Émile, 1897, *Le Suicide: étude de sociologie*, Paris: F.Alcan. (=1985, 宮島喬訳『自殺論』中央公論社。)
- Fusé, Toyomasa, 1980, “Suicide and Culture in Japan: A Study of Seppuku as an Institutionalized Form of Suicide”, *Social Psychiatry*, 15: 57-63.
- 平松義郎, [1960] 1988, 『近世刑事訴訟法の研究』創文社。
- Huish, Marcus B., 1889, *Japan and Its Art*, London: The Fine Art Society.
- Ikegami, Eiko, 1995, *The Taming of the Samurai: Honorific Individualism and the Making of Modern Japan*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. (=2000, 森本醇訳『名誉と順応——サムライ精神の歴史社会学』NTT



出版.)

稲垣史生編, [1958] 1968, 『三田村鳶魚 江戸武家事典』 青蛙房.

コルネーエヴァ・スヴェトラナ (Korneeva, Svetlana A.), 2009, 「切腹をめぐる一考察——切腹刑と斬首刑との比較を通して」, Baxter, James C. ed., *Interpretations of Japanese Culture: Views from Russia and Japan* (日本文化の解釈: ロシアと日本からの視点), ロシア・シンポジウム 2007, 国際日本文化センター発行, pp. 203-215.

Lisle, Égiste, 1856, *Du Suicide: statistique, médecine, histoire et législation*, Paris: Baillière.

Mitford, Algernon B., [1871] 1966, *Tales of Old Japan*, Rutland, Vermont & Tokyo: Charles E. Tuttle Co. (=1998, 長岡祥三訳『英国外交官の見た幕末維新——リーズデイル卿回想録』 講談社.)

中井勲, 1970, 『切腹』 ノーベル書房.

中康弘通, [1960] 1987, 『切腹——悲愴美の世界』 国書刊行会.

小野武雄編, 1998, 『江戸の刑罰風俗誌』 展望社.

大隈三好, 1973, 『切腹の歴史』 雄山閣.

Pinguet, Maurice, 1984, *La mort volontaire au Japon*, Éditions Gallimard. (=1986, 竹内信夫訳『自死の日本史』 筑摩書房.)

Rankin, Andrew, 2011, *Seppuku: A History of Samurai Suicide*, Kodansha International.

Siegmund, Georg, 1970, *Sein oder Nichtsein: die Frage des Selbstmordes*. (=1975, 中村友太郎訳『生か死か——自殺の問題』 エンデルレ書店.)

多和田真太良, 2016, 「『ハラキリ』のエキゾチシズム——舞台における日本の表象——」『芸術研究——玉川大学芸術学部研究紀要——』 6: 29-43.

山本博文, 1994, 『殉死の構造』 弘文堂.

———, 2003, 『切腹——日本人の責任の取り方』 光文社.

四方田犬彦, 1999, 「はらきり【腹切り harakiri】」加藤秀俊・熊倉功夫編『外国語になった日本語の事典』 岩波書店.

## 辞書・辞典

相賀徹夫編, 1974, 『万有百科大事典 6』 小学館.

———, 1988, 『日本大百科全書』 小学館.

青木和夫編, 1992-4, 『日本史大事典』平凡社.

Brewer E. C., 1898, *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*. (=加島祥造ほか訳, 1994, 『ブルーワー英語故事成語大辞典』大修館書店.)

Brokgauz F.A., Efron I.A. 編, [1903] 1993, *Entsiklopedicheskiy Slovarj*, Moscow: Terra. 土井忠生・森田 武・長南 実編訳, 1980, 『日葡辞書』岩波書店.

Hepburn, J.C., 1886, *A Japanese-English and English-Japanese Dictionary*, 3<sup>rd</sup> ed. (松村明解説『和英語林集成』講談社学術文庫.)

実業之日本社編, 1998, 『英和俗語熟語故事大辞典』(近代英学特殊辞書集成③) ゆまに書房.

Morris, William and Mary, 1988, *Morris Dictionary of Word and Phrase Origins*, New York: Harper & Row.

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編, 2000-2002, 『日本国語大辞典』小学館.

奥山益朗編, 1997, 『「死」にまつわる日本語辞典』東京堂出版.

大概文彦, 1933-1934, 『大言海』, 富山房.

Reischauer, Edwin O., Shigeto Tsuru ed., 1983, *Kodansha Encyclopedia of Japan*, Kodansha.

下中直也編, 1988, 『世界大百科事典』平凡社.

下中邦彦, 1985, 『平凡社大百科事典』平凡社.

下中彌三編, 1933, 『大百科事典』平凡社.

*The Oxford English Dictionary*, 1989, 2<sup>nd</sup> ed., vol. IV, Oxford: Clarendon Press.

*The New Encyclopaedia Britannica Micropaedia*, 1988, 15<sup>th</sup> ed., vol.10, Chicago: Encyclopaedia Britannica.

飛田良文・李漢燮編, 2000, 『ヘボン著 和英語林集成 初版・再版・三版対照総索引』港の人.

別表1 切腹に関する語彙の日本の辞書への収録状況

語彙	辞書・辞典								
	日本 国語 大辞典	日本史 大事典	大言海	「死」にま つわる日本 語辞典	世界 大百科 事典	日本 大百科 全書	万有百科 大事典	大百科 事典 (1985)	大百科 事典 (1933)
引責	△	×	×			×			
追腹	○	×	△(殉死 の項目)			△殉死			
扇腹			×						
割腹	○	×	○			△切腹			
鎌腹	○		○			○			
諫死	○	×	×			×			
先腹	○	×	×			△殉死			
自害	○	×	○	○		△自殺			
自決	○	×	×	○		×			
自裁	○	×	○			×			
自殺						○			
賜死	×	×	△(切腹 の項目)			×			
自死	○	×	×			×			
自尽	○	×				×			
自刃	○	×	○			×			
殉死	○	○	○	○	○	○(古川 哲史による 執筆)			
切腹	○	○	○	○	○(平松 による 執筆)	○(古川・ 稲垣による 執筆)	○(北原 章男による 執筆)	○(平松 による 執筆)	○(鎌倉 による 執筆)
粗忽死、 粗忽腹	×	×	×			×			
詰腹	○	×	?		△切腹	×			×
屠腹	○	×	○			△切腹			
供腹	○	×	○			×			
腹			○		○	○			
ハラキリ					○	×			
腹切	○	×	○		△切腹	×			×
憤死	○	×	?			×			
憤腹	×	×	?			×			
無念腹	○	?	×			×			
面目(死)	△面目	?	×			×			

別表 2 切腹に関する語彙の外国の辞書への収録状況

語彙	辞書・辞典							
	和英語 林集成 (ヘボン)	A Dictionary of Phrases, Slangs & Fables	The Oxford English Dictionary	The New Encyclopaedia Britannica Micropaedia	Kodansha Encyclopedia of Japan	Brewer's Dictionary	日葡 辞書	Morris Dictionary of Word and Phrase Origins
hara	○				○	×	○	×
hara wo kiru	○				△	×	○	×
harakiri	○	×	○	△	○ (J. Seward に よる執筆)	○	△	○ hara- kiri, hari-kari
junshi	○				○	×		×
seppuku	○	×	○	○	○ (映画)	×	×	×
happy dispatch	×	○	○	×	×	△ harakiri 参照		×